

弱

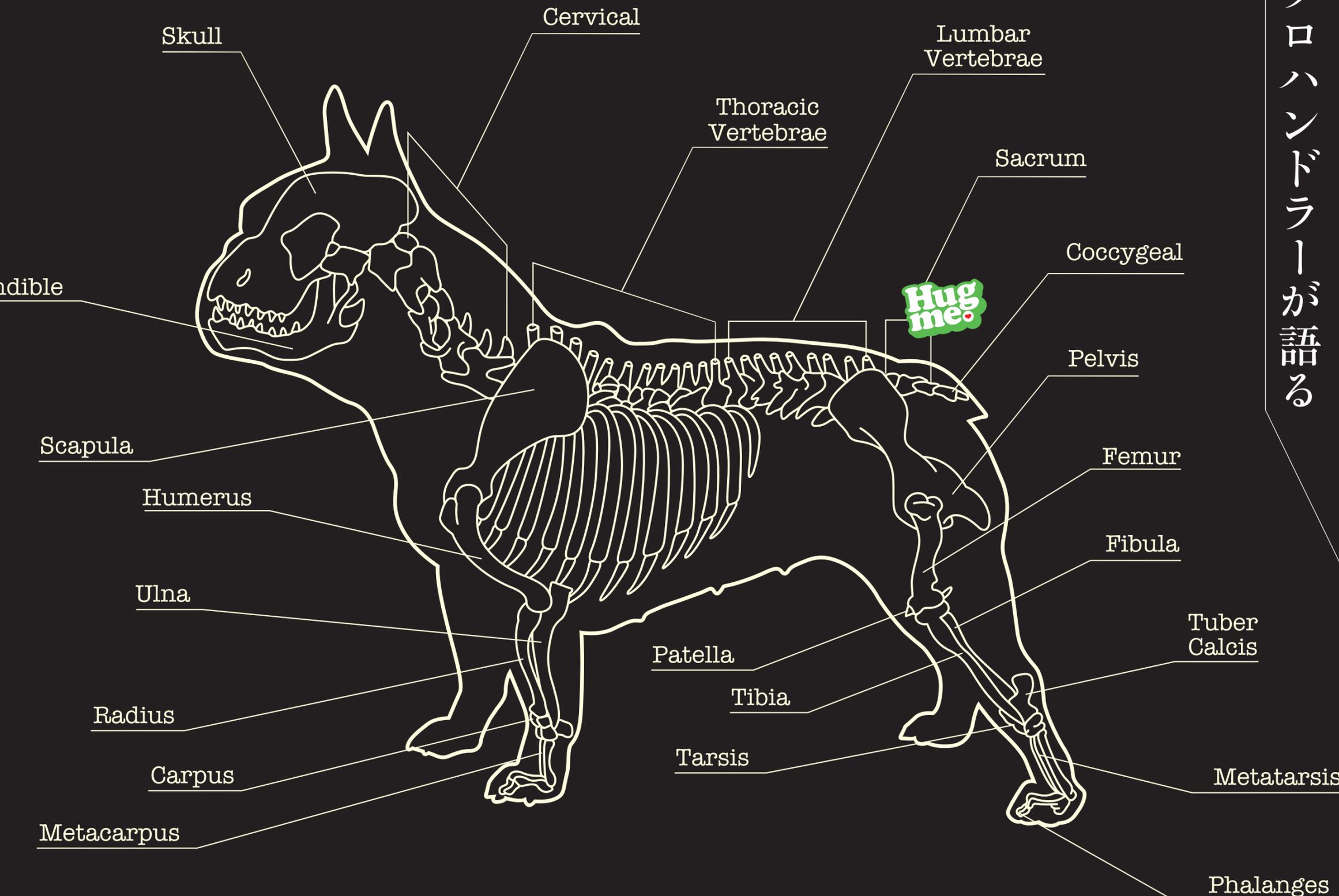
点

と

克

服

法



フレインチブルドッグの
プロハンドラーが語る

睡眠時にいびきをかく子は気道がスムーズではないので、暑さに弱いと判断してよいでしょう。



短吻の出目犬種では、とてもなやまずい病気で、犬同士の遊び、異物混入、草木への接触による外傷や、眼瞼内反症、アレルギーによる刺激で角膜に傷が付き潰瘍になった状態です。症状としては涙目になり、眼をしばしばさせ、黒目には白濁が見られます。痛みもあるため、手で擦ったり壁に擦るような仕草をします。早期発見、早期治療であれば点眼薬のみで完治しますが、治療が遅れたり、治療過程が悪いと白濁が残ってしまったり、眼球の内容物が漏れて、最悪なケースでは失明してしまいます。日頃からよく眼を観察し、異変に気付くことが大切です。眼が内反気味の子やドライアイの子は、日頃から目薬をさしてあげて、清潔で潤いを失わない状態に保つことが予防になります。私の場合はホウ酸水を適切な濃度に希釈した

●角膜潰瘍

どのように冷やした状態で病院へ運んでください。熱中症は命に関わりますし、後遺症が残ることもあります。くれぐれも気をつけてください。

この病気もフレンチでは多く見られます。後天的(怪我、オーバーワーク)と先天的に膝蓋骨の発育不全、膝蓋骨周囲の組織異常によって脱臼しやすくなる場合と2種類あります。典型的な症状は、歩いたり低速で走っている際に、ケンケンやスキップをするようでしたらパテラの可能性が高いです。しばらく走っているとそれらの症状は消失しますが、一時的に脱臼していたものが元に戻るだけであって、脱臼を繰り返しながら関節に負担をかけ悪化していきます。重度の場合は手術が必要になりますので、おかしいな? と感じましたら受診してください。

●膝蓋骨脱臼「パテラ」

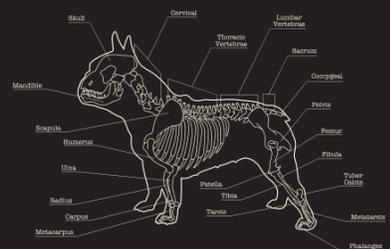
ものをスプレー容器に作り置きし、毎日眼に直接スプレーしてあげています。

軽度であってもパテラと診断されたら、普段の生活に工夫が必要で、犬同士で遊ばせる際に上に乗られないようにする。ボール投げなどの急激なダッシュ、ブレイキをかける遊びは避けるようにする。滑る足場では絶対遊ばせない、生

●アレルギー疾患

フレンチに限らず犬は何らかのアレルギーを持っています。無症状のものから激しく症状を現すものまでさまざまです。アレルギー検査を受けても、該当する項目が複数あつて、なかなか原因を特定できないといったパターンをよく耳にします。ここでは、私の知る範囲でフレンチによくあるアレルギー、症状などを書かせていただくこうと思います。

まず思い浮かぶのが食物アレルギーですが、肉類や穀物など、特



プロハンドラー
ヤマなかけんすけ
山中健介

フレンチブルドッグに携わって15年。その他にロットワイラーも長年にわたりブリーディングしてまいりました。現在ではショーハンドラーとしてフレンチを中心に活動しつつ、自らも6頭のフレンチを所有しております。犬舎名はLINDAS。



●椎間板ヘルニア

フレンチブルドッグの代表疾病の1つであり、発症すると生活に大きな支障が出たり、場合によっては命に関わるケースもあります。フレンチは骨格構成上、脊椎の間隔が狭かったり、先天的に異形成された個体が少なくないです。よって、何らかの原因で椎間板が圧迫されることにより症状を現します。発症の誘発因子として、肥満、加齢、筋肉減少、過剰な運動、段差の登り降りなどが考えられます。患部が腰椎の場合は、後肢に麻痺が生じ、ふらつきから完全に後肢を投げ出し、前脚だけで歩く感じ(ツザラシ様)まで程度はさまざまです。頸椎でヘルニアを起こした場合では、頭が上がらなくなり、持ち上げると激痛があるため、体を起こさない体勢を犬はとります。頸椎ヘルニアの恐ろしさは、呼吸をつかさどる神経に影響が出るため、場合によっては発症から数日で亡くなることもあります。さらに腰椎が主に麻痺なのに比べて、激しい痛みがあります。痛みのためバニツクを起こし、シヨック死するケースもあります。

初期の症状は頸椎の場合、なんともなく元気がない、頭を上げずう

●熱中症

短吻種で最も気を使うのが熱中症です。真冬以外はオールシーズン注意が必要と言えます。また、暑さに強い、弱いとは個体差がありますから、その子に合った限界を見極めることも大切です。では、どのようなことで個体差が出るのか? 基本的に暑さに弱いと思われる個体は、鼻がよくつぶれ、鼻腔の狭い子。軟口蓋といわれる喉の奥の部分が生まれつき肥

になりやすい。そして肥満。この3点は呼吸しづらいので、熱中症で呼吸困難に陥りやすいと言えます。暑さに急にパタンと倒れてしまうパターンです。睡眠時にいびきをかく子は気道がスムーズではないので、暑さに弱いと判断してよいでしょう。もう一点、性格的なものが熱中症に影響することも多々あります。興奮しやすく、多動傾向の強い子は自ら体温を上げていきますから、オールシーズン注意が必要になります。運動後は速やかに冷やして、興奮しない状況にしてあげてください。余熱で熱中症に進行することもあります。首、お腹、鼠径部などに、氷水に浸したタオルなどを当ててあげると効果的です。また、冷たい水を口の中にスプレーしてあげるのもよいでしょう。予防的には暑い時期はクールベストを着させて運動させることをお勧めします。熱中症の手前では舌が巻き舌になり、眼をむき出したようになり、舌が舌の奥に巻き込まないよう引っ張り出して気道を確保し、先ほ





手作り食で正しい栄養価を摂取させるには 飼い主さんの勉強が必要になります。

定の食材に反応する場合と、ドライフードの脂分に反応している場合があります。食物アレルギーの場合、症状は**日常的な下痢、脱毛、痒みなど、主に腸炎、皮膚炎**です。腸炎の症状がある場合は脂分というより、食材自体に原因がある場合がほとんどです。食事内容を変更するなどして合ったものを探さなければなりません。脱毛や皮膚炎は食材がアレルギーになっている場合もありますし、脂分で反応しているだけのケースも多いです。判断が難しいのですが……。まずは低脂肪分のフードに切り替えて様子を見て、改善されないようなら魚が主成分のフードにされるとよいと思います。それでもダメなら完全手作り食ですね。ただし、手作り食で正しい栄養価を摂取させるには飼い主さんの勉強が必要になります。**指間が赤くなっていたり、顔のシワの間、口元に赤みを帯びていたら脂分が過ぎていると簡単に判断できます。**また、夏場は脂分を必要としないので、予防として夏場のフードを低脂肪にするのもよいと思います。

何らかの草木や花粉に反応しています。症状は主に体を痒がる、眼を気にする、結膜炎や結膜浮腫になる。顔の皮膚がなんとなく腫れぼったくなり、厚みがあるように感じる。このような症状を持っている子は、飲み薬と点眼薬を常備しておくとういいます。

アレルギーは症状が重いと呼吸がしにくくなったり、ショック状態に陥ることもあるので、とりあえず投薬で症状を抑える必要があります。アレルギーは炎症です。ステロイドが一番効果的です。長期常用する薬ではないですが、急性のアレルギー症状の場合、**ステロイドは即効性があり安全な薬だ**と思います。

●アカラス(ニキビダニ症)

主な症状は脱毛で、その部分は若干赤みがあります。円形に局所性の脱毛から始まり、悪化すると全身に拡がっていきます。顔面から首、横っ腹あたりがよくできる部位です。**ニキビダニが皮膚に寄生することで発症する**のですが、ほとんどの犬が寄生していると言われていますので、根本の原因は

フレンチブルドッグ飼いなら 知っておきたい、やってあげたい、 特に注意してあげたいこと**10**条

知っておきたいこと①

「小型室内犬でありながら、大型犬の体質をも持ち合わせる犬種がフレンチブルドッグ」

他のトイドッグと違って、パワフルで筋肉質。アクティブな暮らしを望む犬種です。室内メインで過保護に育てると健康に育ちません。ストレスも感じやすい犬種だと思えます。外気浴をたくさんさせてあげ、自由に走り回れる環境作りを心がけてください。ただし、**暑さとオーバーワークだけは要注意**。ヨーロップ原産の犬を、多湿であり環境で劣る日本で飼育するには、細やかな工夫と配慮が必要となります。

知っておきたいこと②

「フレンチは夏は太りやすく、冬は痩せやすい」

長毛犬は寒さを感じると毛量を増やして身体が対応しますが、アンダーコートが少ない短毛犬は寒さを感じると燃焼します。脂肪を使い果たすと痩せてきてしまいます。痩せることは健康的ですが、抵抗力も弱くなるので、さまざまな病気にかかるリスクが高まります。**免疫性の腸炎が発症する季節は冬場がほとんど**です。夏場は反対にカロリーが余りやすく、運動量も落ちますので、肥満に気をつけたいといけません。かといって暑い季節に運動を無理にさせるのは危険ですので、食事でコントロールが基本です。私は夏季と冬季の食事内容を全く違ったものにしていきます。

自己免疫力、抵抗力の低下だと思われる。1歳未満の若齢犬が発症した場合は自然治癒することが多く、成犬で発症した場合は難治性になります。いずれの月齢も獣医での治療法は駆除薬や薬浴になります。個人的には若犬での駆除薬はお勧めしません。細菌感染で患部が化膿してしまった場合のみ抗生物質を用いて治療しますが、**基本的には自然治癒を待つほうがよい**と思います。根本は自己免疫力、抵抗力の問題ですから、強い駆除薬でニキビダニを殺虫しても、再びダニに感染すればまた発症します。むしろ、次に発症した場合さらには症状が重くなるケースが多いように感じます。若い犬でしたら、清潔だけは保ちつつ、自然治癒を待つことをお勧めします。加齢と共に抵抗力が高まることが大いに期待できるからです。不幸にも充実した成犬で発症した場合は、重症化しますし、他に基礎疾患がある場合もあるので、早期に治療を始めてください。

知っておきたいこと③

「実は耳が汚れやすい」

立ち耳犬種は蒸れないので耳は大丈夫と思われがちですが、フレンチは**皮脂の分泌が多く、耳の立ち方の角度がホコリや異物が入りやすい構造になっています**。耳の中が汚れてくるとチャームポイントであるパットイヤヤーが台無しになる恐れも。耳が外側に開いて左右の耳間が広がってしまいます。痒いために擦り付いたり、打ちつけたら耳血腫になってしまふこともあります。さらに酷いケースでは平衡感覚に支障が出て、頭を傾け、ふらつき症状がでます。**こまめな耳掃除が予防になる**のですが、耳道は直線ではありません。L字になっているため、普通の綿棒やコットンでの掃除では奥に溜まった汚れを取りきれません。獣医師にお願いするのがベストでしょう。

知っておきたいこと④

「たっぷりコミュニケーション」

フレンチは知的で繊細、遊び好きで寂しがり屋さん。犬同士で遊ぶことや玩具で遊ぶのも好きです

